

# 如蘭塾

第2次世界大戦中の昭和17(1942)年、財団法人日満育英会が発足し、御船山山麓に塾舎・寄宿舎・迎賓館・運動場等を整えた「如蘭塾」が誕生しました。戦火が中国に拡がる中で、満州(現在の中国東北部)の若い女性たちを給費留学生として迎え入れる、当時の国際交流の壮大な試みの場が武雄に誘致されました。

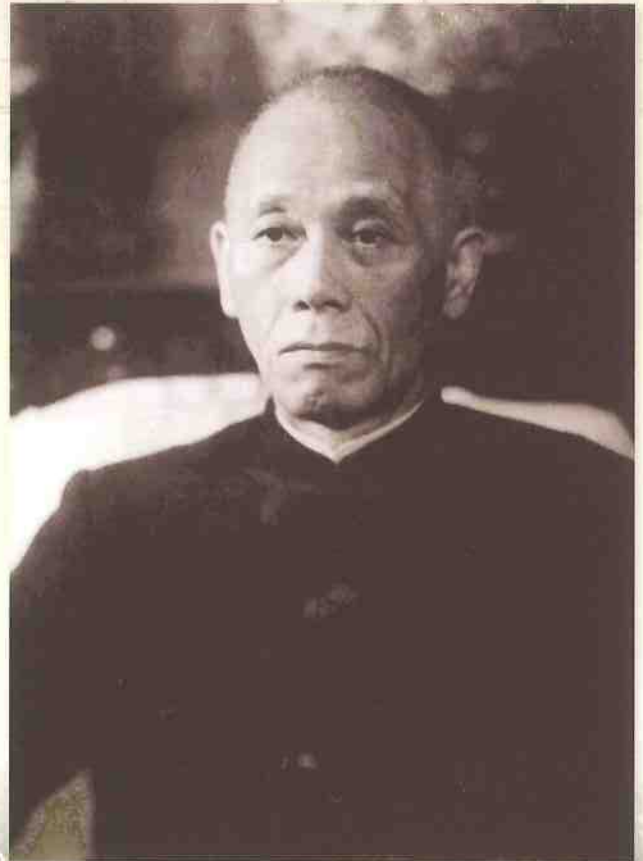
大戦後の昭和27(1952)年、日満育英会は、財団法人清香奨学会として新たなスタートをきり、現在、佐賀県出身の大学生や中国からの留学生への奨学金の給付や、佐賀県内の高校生を中国に派遣するなどの新たな育英事業を行っています。

## 如蘭塾創立者 野中忠太 肖像写真

明治19(1886)年、現在の佐賀県鹿島市に池上林平の四男として生まれる。明治43年に佐賀市の野中烏犀園11代目・野中亮助氏長女と結婚、養子となる。

大正4年(1915)年、満州にわたり奉天(現在の瀋陽)で貿易商を営む。しだいに頭角を現して複数の会社の社長を兼任、土地・建物・タクシー・ホテル・農場などを広く傘下に収め、企業家として成功をおさめた。

昭和22(1947)年、帰国。昭和26年、佐賀市千代町(現在の佐賀市柳町)にて逝去。



# 野中忠太と如蘭塾

かつて満州と呼ばれていた中国東北部で事業家として成功した野中忠太は、その成果を友好と文化の交流に還元しようと日満育英会の設立を志した。中国の若い子女を日本に給費生として留学させ、日本の文化や家庭の実情に親しませることによって相互理解を深めようとした。

この計画は昭和15(1940)年に公にされ、各方面の賛同と共鳴を呼び、同時に施設の誘致活動が起り、最終的に武雄市(当時の佐賀県杵島郡武雄町)が選ばれた。

育英施設の建設用地には、武雄町の景勝の地・御船山の麓が最適とされ、約39万6千㎡の丘陵地が買収された。昭和17年には文部大臣の設立許可があり、財団法人日満育英会が正式に発足、直ちに塾舎・寄宿舎・迎賓館・運動場・プール等の建設が始められ、翌18年初めには、一通りの設備が整い、今や梅の名所となった御船が丘梅林も、地元の労力奉仕を得て整備された。

昭和18年3月29日、16~20歳の第一期生30名が武雄に到着(1名は開塾前に帰国)。2年間の過程を経て、昭和20年1月29日に無事卒業した。第二期生22名は、昭和19年3月に入学するが、戦争が激しさを増す中、第三期生の募集は中止され、第二期生も終戦によって、課程途中で帰国することとなった。

如蘭塾は、戦争の終結と同時に、短い歴史を閉じることになった。



## ◆ 如蘭塾開設当時の東アジア図

明治37(1904)年に始まる日露戦争の勝利以降、日本は東アジアへの侵略行為を拡大させた。明治43(1910)年には韓国を植民地とし(韓国併合)、朝鮮総督府を置いて支配した。さらに、昭和6(1931)年9月の奉天郊外での柳条湖事件以後、日本は半年で満州の大部分を占領、傀儡政権である「満州国」を樹立。日本から多くの人々が新天地を求めて満洲へ移住していくこととなった。



奉天ビル全景



奉天ビル 正面玄関大ホール



## ◆ 落成記念 奉天ビル絵葉書

満州で事業家として成功した野中忠太がホテルとして開業した奉天ビルの記念絵葉書。



奉天ビル 6階 レストラン



ベビーゴルフ



大浴場

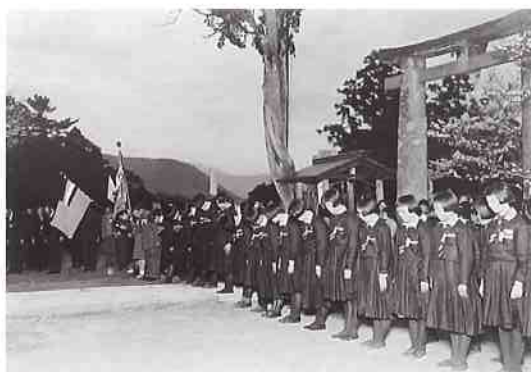
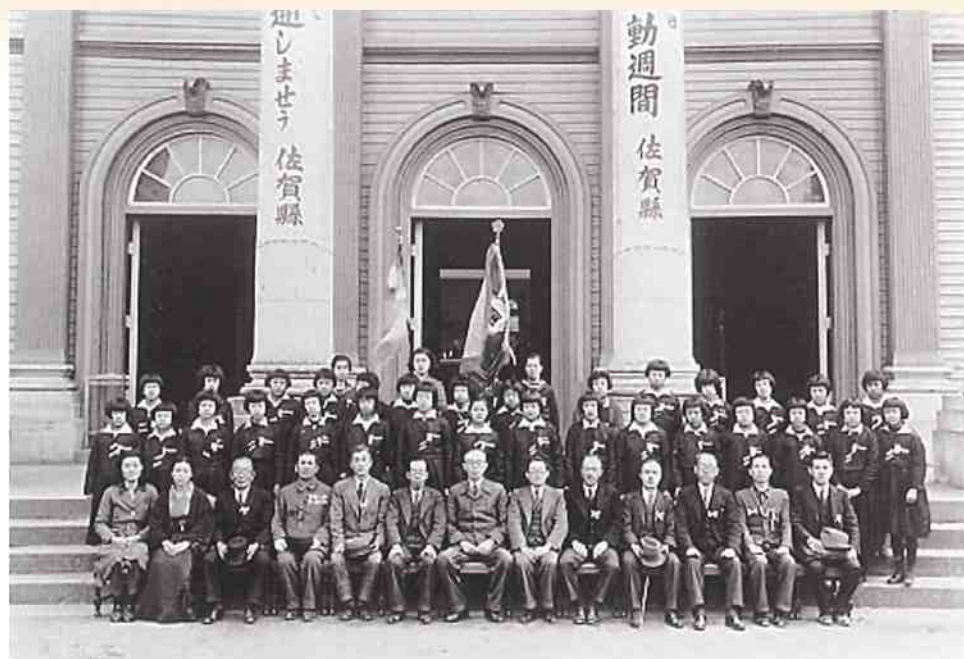


応接室

# 如蘭塾生たちの来武

「如蘭塾」の名には、塾生たちが小輪の花から淡い色彩と豊かな芳香を秘めた東洋蘭のように開花することを願う気持ちが込められている。また、蘭の花は満州国皇室の花でもあった。昭和18(1943)年3月29日には塾生30人が、翌19年には第二期生22人が武雄に到着した。当時の武雄の町民は、小旗をうち振って彼女らを歓迎した。

如蘭塾第一期生の  
佐賀県庁訪問記念  
昭和18(1943)年3月



◆ 武雄神社選擇



◆ 武雄駅集合写真



◆ 御船山と助教、塾生たち

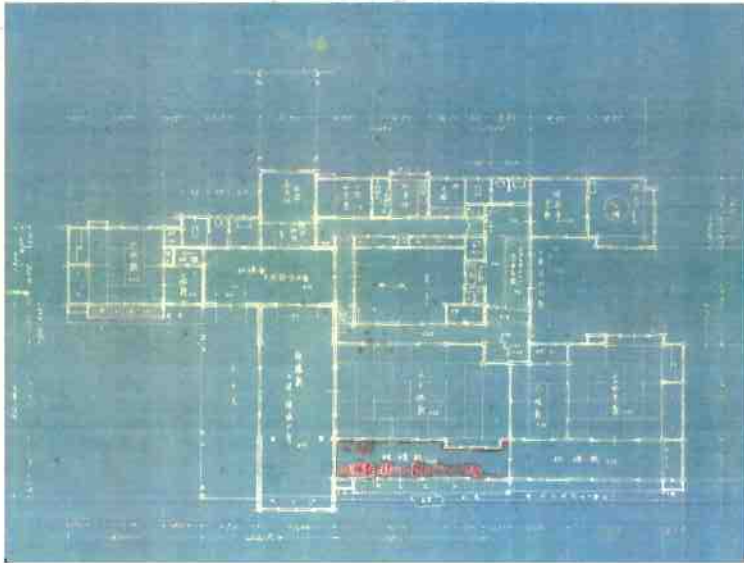


◆ 如蘭塾宿舍と塾生たち

# 遠藤新と如蘭塾

明治22(1889)年。福島県生まれ。東京帝国大学建築学科卒業。卒業後、アメリカのフランク・ロイド・ライトに師事した遠藤は、旧帝国ホテルなどを共同設計。44歳のとき旧満州(現在の中国東北地方)に渡り、多くの建物を設計した。

彼には「日満女塾」と呼ばれる幻の作品があった。満州に建設されたと考えられたものの、その所在地と在否、設計内容は不明のままだった。この「日満女塾」が実は如蘭塾のことであると確認されたのは、平成7(1995)年のこと。九州で、遠藤設計と分かっている作品は、現在如蘭塾だけである。

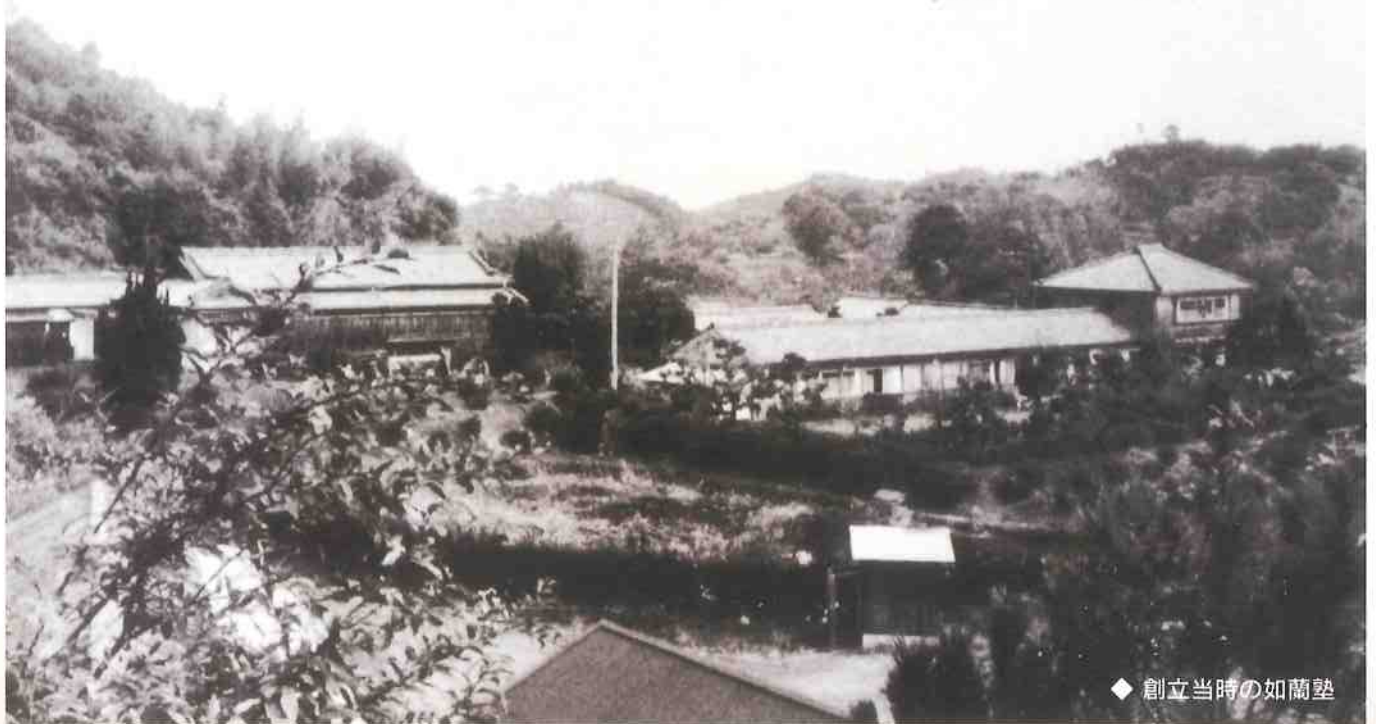


◆ 如蘭塾設計図



◆ 遠藤新肖像写真(個人蔵)

## 塾 蘭 如



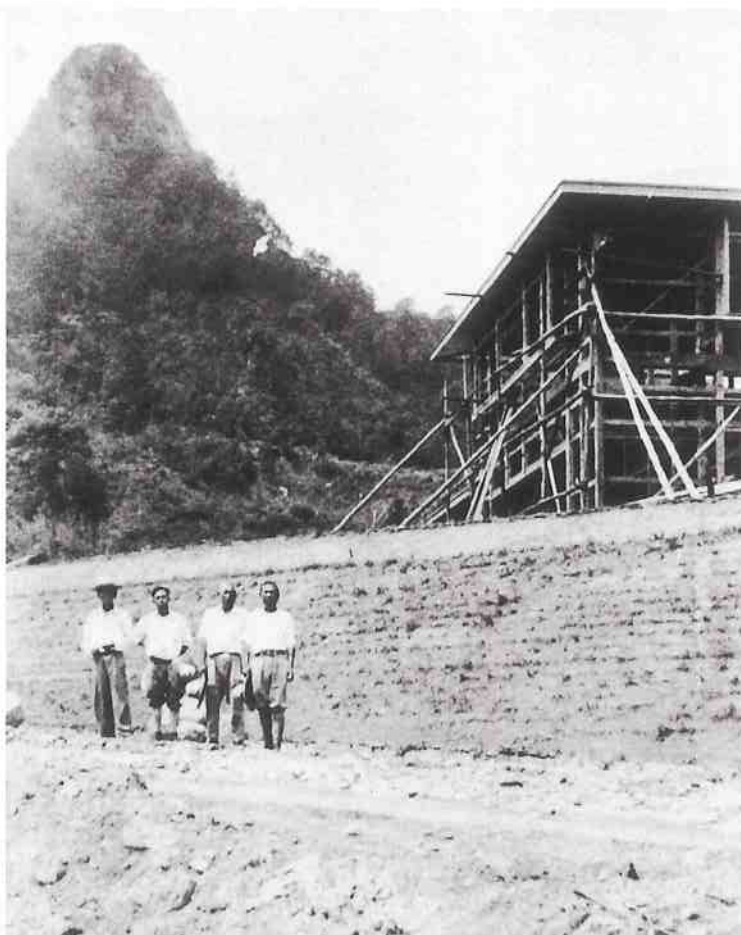
◆ 創立当時の如蘭塾



◆ 建設途中の如蘭塾



◆ 如蘭塾入口の柱と修復された寄宿舎



◆ 造成中の運動場と建設途中の寄宿舎 背後に御船山の南岳が見える。



◆ 建設当時から残る照明器具

丸いデザインは遠藤新の特徴の一つとされる。



◆ 山水図屏風

松永南楽 作

奉天省美術協会審査員・松永南楽の作品。「富士山図屏風」と対をなす。日中関係の絆を具現化するものとして「富士山図屏風」が日本的なもの、武雄のランドマーク御船山の奇岩が中国的なものの象徴と見立てて描かれたのではないだろうか。



# 如蘭塾ゆかりの作品

## 「如蘭塾」

愛新覚羅溥傑 作

満州国の皇帝となった溥儀の実弟・愛新覚羅溥傑の書。昭和12(1937)年元候爵家の嵯峨浩と結婚。書道家としても名高い。平成6(1994)年2月28日、北京で逝去した。享年86歳。



## 「坤道帰元」

満州国特命全権大使 王允郷 作

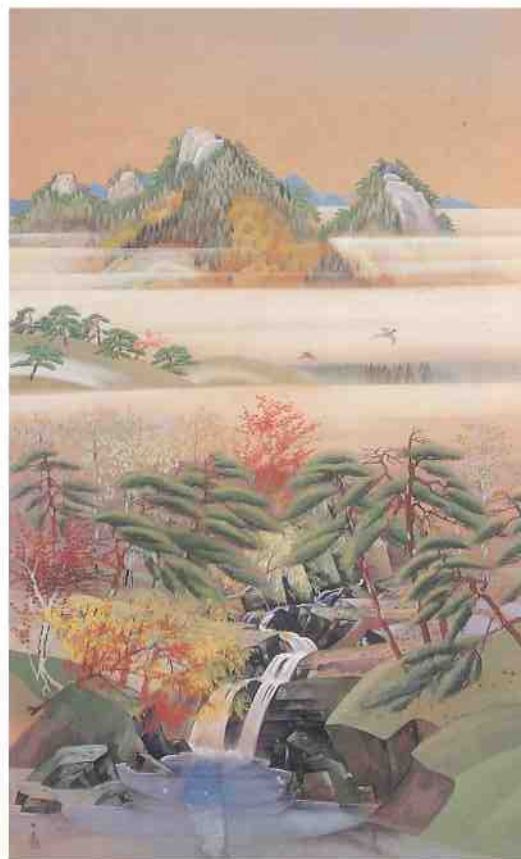
満州国特命全権大使・王允郷が、如蘭塾開塾に寄せて揮毫したと思われる。当時の新聞によれば、彼の一行は昭和17(1942)年12月、開塾直前の如蘭塾視察のため、武雄を訪れている。「坤」は女性を意味する語という。現在も如蘭塾迎賓館(含草閣)の玄関に掲げられている。



## 四季山水図襖絵

松永南樂 作

武雄の秀峰・御船山の四季をテーマに描かれた襖絵。如蘭塾建設中の昭和17(1942)年、奉天省美術協会審査員の松永南樂が、武雄に6ヶ月滞在して描き上げた17枚の作品の一つ。現在も如蘭塾迎賓館(含草閣)の応接室を飾っている。



天照

「日」「月」「天照皇大神」

肅親王 作

肅親王(1866~1922)は、清朝の皇族のなかでも、最も格式の高い家系の人物で、親日家として知られる。「東洋のマタ・ハリ」と呼ばれ、日中間で数奇な運命をたどった川島芳子は彼の実子である。

日本軍は、神道を日本の支配を強める手段として利用し、満州国の精神的なよりどころにしようと、昭和15(1940)年に天照皇大神を祀った神社「建国神廟」を現在の中国・吉林省に創建している。この書も、そうした流れの中でしたためられたものと推測される。時代を語る資料の一つとして、貴重なものであると同時に、如蘭塾と満州国のつながりを示すものとして收藏されている。

